(19)日本国特許庁(JP)　(12)登録実用新案公報(U)　(11)実用新案登録番号
実用新案登録第3109564号
(U3109564)
(45)発行日　平成17年5月19日(2005.5.19)　(24)登録日　平成17年3月30日(2005.3.30)

(51)Int.Cl.[7]	F I		
B43K 23/012	B43K	23/00	D
B43K 3/00	B43K	3/00	G
B43K 23/008	B43L	15/00	
B43L 15/00	G09B	19/24	F
G09B 19/24	B43K	23/00	C

評価書の請求 未請求　請求項の数 13　ＯＬ　（全 14 頁）

(21)出願番号　実願2004-7644(U2004-7644)
(22)出願日　平成16年12月27日(2004.12.27)

(73)実用新案権者　505000343
游　猛堅
台湾基隆市楽利三街２８巻２６－３號４樓
(74)代理人　100070024
弁理士　松永　宣行
(74)代理人　100125081
弁理士　小合　宗一
(74)代理人　100125092
弁理士　佐藤　玲太郎
(72)考案者　游　猛堅
台湾基隆市楽利三街２８巻２６－３號４樓

(54)【考案の名称】執筆姿勢矯正装置

(57)【要約】
【課題】　執筆姿勢矯正装置は、間違った執筆による痛みや傷害を回避し、執筆の姿勢を正確に学習するための執筆姿勢矯正装置を使用者に提供する。
【解決手段】　執筆姿勢矯正装置は、少なくとも使用者の親指、中指、及び人差し指が位置決めされる複数の位置決め部が設けられることにより、使用者の親指、中指、及び人差し指の加力点を結合させ、使用者の薬指と小指を中指の後に付随させることで、使用者の手指が本考案の執筆姿勢矯正装置によって執筆の姿勢を把握し、この筆記用具を握る場合、手指が自然に湾曲して掌に接触することがなく、掌を中空に保持する状態となる。
【代表図】　図５

【実用新案登録請求の範囲】
【請求項１】
執筆姿勢矯正装置であって、
使用者が手の平に握るための本体と、
前記本体のトップに形成され該使用者の虎口に当接されるための当接部と、
前記本体の片側に形成され、該使用者の親指の第２の指節の指肉が位置決めされるための第１の位置決め部と、
前記本体の別の片側に形成され、筆記用具が位置決めされるための第２の位置決め部と、
前記第２の位置決め部の前記本体より離れた片側に形成され、該使用者の中指の第３の指節の左側指肉が位置決めされるための第３の位置決め部と、
前記第２の位置決め部と前記第３の位置決め部との間に形成され、該使用者の人差し指の第３の指節の指肉が位置決めされるための第４の位置決め部と、
前記第３の位置決め部の前記第２の位置決め部より離れた片側に形成され、該使用者の薬指と小指が握って自然に湾曲し、前記第１の位置決め部、前記第３の位置決め部、及び前記第４の位置決め部により該使用者の親指、中指、及び人差し指の加力点を結合させるための握り部とを備える、執筆姿勢矯正装置。
【請求項２】
前記本体は水滴状である本体表面を有する、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項３】
前記本体には、さらに複数の検知部材が設けられている、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項４】
前記第１の位置決め部は前記当接部に接続され凹状となる、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項５】
前記第２の位置決め部は、前記当接部の前記第１の位置決め部より離れた箇所に接続され凹状となる、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項６】
前記第３の位置決め部は前記当接部に接続され凹状となる、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項７】
前記第４の位置決め部はやや凸状となる、請求項１に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項８】
筆記用具の頭部に設置されている執筆姿勢矯正装置であって、
前記頭部の片側に形成され、該使用者の親指の第２の指節の指肉が位置決めされるための第１の位置決め部と、
前記第１の位置決め部の片側に形成され、該使用者の人差し指の第３の指節の指肉が位置決めされるための第２の位置決め部と、
前記第２の位置決め部の前記第１の位置決め部より離れた片側に形成され、該使用者の中指の第３の指節の指肉の左側が位置決めされるための第３の位置決め部と、
前記第１の位置決め部、前記第２の位置決め部、前記第３の位置決め部にそれぞれ対応して設置され、該使用者の親指、人差し指及び中指が前記第１の位置決め部、前記第２の位置決め部、前記第３の位置決め部を過度に握る場合、警告信号を発する複数の検知部材とを備える、執筆姿勢矯正装置。
【請求項９】
前記第１の位置決め部は浅凹槽状となる、請求項８に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項１０】
前記第２の位置決め部は浅凹槽状となる、請求項８に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項１１】

前記第３の位置決め部は浅凹槽状となる、請求項８に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項１２】
前記複数の検知部材は圧力検知器とインジケータとの組合せからなる、請求項８に記載の執筆姿勢矯正装置。
【請求項１３】
前記複数の検知部材は圧力検知器とブザーとの組合せからなる、請求項８に記載の執筆姿勢矯正装置。
【考案の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本考案は、執筆姿勢矯正装置に関し、特に、間違った執筆による苦痛や傷害が解消されるように、正確な執筆姿勢を学ぶのために使用者に提供される執筆姿勢矯正装置に関する。
【背景技術】
【０００２】
通常、例えばボールペン、鉛筆、万年筆、サインペン、マジックペン（marker pen）、針ペン（needle pen）、水筆ペン及びドローイングペン（drawing pen）等の筆記用具は円形の筆管であり、しかも、これらの筆記用具の筆管の弧度が小さいため、一般の人が長期間にわたって執筆に力を入れすぎて書くと、中指の最末端の関節に深い凹みが残り、さらに中指や親指にたこができることとなる。また、これらの筆記用具の細くて丸い筆管が筆記することで後へずれることのないように、使用者は指に力を入れすぎるため、人差し指が圧力を受け歪んで変形する。
【０００３】
児童の執筆の瞬間はあらゆる学習の始まりと言われているため、正確な執筆姿勢が児童にとってはとりわけ重要である。しかしながら、このような基礎構築の作業はよく無視されるため、小さい頃から間違った執筆姿勢や筆記習慣に慣れてしまう人が殆んどである。

【０００４】
これらの不正確な方法は、例えば図1A及び図1Bに示すように、掌が中空となっておらず、かつ、手指の間違った運用や過度の緊張によって関節が直角となり、または指先で筆管を支え、筆記に力を入れすぎることとなる等である。このように、筆記者（特に児童）には大きな負荷がかかり、筆記時に痛みを感じ、筋肉や骨格が疲労し易くなるだけでなく、傷害となるおそれがあり、書き取りの宿題などへの嫌悪感から学習の楽しさに障害をきたすため、その影響は極めて大きい。
【考案の開示】
【考案が解決しようとする課題】
【０００５】
上記の問題を解決するために、図2A及び図2Bに示すように、執筆練習器10が知られている。執筆練習器10には、手指で握るための弧形凹槽10aと凹槽10aに配設されたパッド10bとが設けられている。パッド10bには筆記用具100を収容するための切込み10cが形成されている。ただし、執筆練習器10は凹槽10aに5つの手指がそれぞれ収容されるが、中指、薬指、小指が筆記方向に向かって凹槽10aを握りしめるため、中指、薬指、小指を手の平にきつく握るという間違った姿勢となることがある。
【０００６】
従来より、執筆の要領は「虚掌実指」にあり、執筆が守るべき原則は「執筆は一定の法無く、虚にして安」にあるが、執筆練習器10を応用する場合、使用者は間違った執筆姿勢を矯正できず、手部の疲労や不快感を感じる。同時に、図2Bに示すように、執筆練習器10は凹槽10aに手指がそれぞれ収容されるが、使用者の人差し指がほぼ90度の角度で筆管を支えるという正確な執筆姿勢を設計に取り入れていないため、使用者の人差し指が圧力を受け歪み変形するのみならず、執筆を練習し始めたばかりの児童は、執筆の過労によって

筆記に抵抗感を感じることとなる。

【課題を解決するための手段】

【０００７】

上記の執筆練習器10の問題を解決するために、台湾実用新案公告第314836号には、執筆を補助するための訓練器20が提案されている。図3A及び図3Bに示すように、訓練器20は主に筆嵌め筒21と、2つの穿通筒22、23からなり、筆嵌め筒21は中空であってかつ筆記用具100の筆管を穿入させるために用いられる。2つの穿通筒22、23は人差し指と中指の第3の指部の穿入や位置決めのために用いられる。その第3の指部とは手指の根部（即ち掌部に接続された部分）から順序にしたがって、掌に接続された指節が第1の指部であり、その次が第2の指部である。一般に、親指は2つの指部があるが、その他の手指は3つの指部があることはいうまでもない。

【０００８】

訓練器20は穿通筒22及び中指を穿入させるための湾曲角度を有する穿通筒23の中段箇所において中指が湾曲して筆管を支えるための切込み23aが設けられている。ただし、異なる使用者によっては手指と関節の大きさや細さが異なるため、2つの穿通筒22、23が小さすぎると、手指や関節が引っ掛かりて穿入や取り出しが困難となったり、手指や関節が全く穿入できなくなる。したがって、2つの穿通筒22、23が小さすぎると、手指の位置決めの確定や保持ができなくなり、筆記が困難となる。

【０００９】

また、図3Bに示すように、このような訓練器20は人差し指と中指の位置決めに用いられるため、「虚掌実指」が保持されるその他の手指の位置決めのための正確な執筆姿勢を確保できず、使用者がその親指の指先で筆管を支えて筆記用具100の筆先より離れた箇所を挟むこととなるため、訓練器20が適用される場合、使用者は運用の間違いによって手指を手の平にきつく握ってしまい、関節の過度の緊張や指先が筆管を支えすぎる姿勢となり、手指の筋肉と骨格をリラックスできず疲労しやくなることがある。

【００１０】

上記の従来装置の欠点を解決するために、台湾実用新案公告第454705号には執筆練習器30が提案されている。図4Aに示すように、執筆練習器30は中空柱体状となって両側にはそれぞれ筆記用具100の接続された筆管を貫通させるための開口31が設けられている。執筆練習器30の表面には手指の位置決めや位置シフトのための位置決め点32と位置シフト体33が設けられている。

【００１１】

ただし、このような執筆練習器30は親指、人差し指、及び中指等の3指の位置決めができるにとどまり、薬指と小指の筋肉や骨格の正確な姿勢を維持できず、筆記する場合、図4Bに示すように、薬指と小指を手の平に強く握り、力の負担となっている。したがって、このような執筆練習器30が適用される場合、使用者は筋肉や骨格のリラックスができず疲労しやすいため、従来技術の欠点を解決することができない。

【００１２】

また、執筆練習器30は位置決め点32が手指の位置決めのみに用いられるが、人間工学に一致する執筆構造を有しないため、位置決め点32に当接される手指が一定の筆記時間の後、痛みを感じることとなる。また、執筆練習器30の中空部分は特定サイズの筆記用具しか収容できないため、異なるサイズである筆記用具に応用できず、異なる筆記用具を使用する際に取替えの手間が増える。

【００１３】

しかも、執筆練習器30が筆記用具100に一体形成されている場合、執筆練習器30は翼状となって開口する位置シフト体33を3つ有するため、容器に収容することが困難であり、携帯するために例えば上着のポケットに収容することも不便である。したがって、このような執筆練習器30は執筆姿勢の矯正を使用者に正確に提供できず、しかも筆記用具の外観が美しくなく、さらに収納や形態上の不具合等の種々の欠点がある。

【００１４】

また、上記の従来技術は使用者が間違った姿勢で執筆しても警告を発することができないため、使用者が正確な姿勢で執筆していない場合、手指を位置決めする位置があっても、使用者の手指運用が間違っているか、力を入れすぎているか、またはその他の間違った姿勢で執筆しているかを、矯正することができない。よって、使用者は正確な執筆姿勢を習得することができない。

【００１５】

したがって、上記の従来技術の種々の欠点を解決するために、執筆姿勢の矯正及び異なる年齢や性別及び使用習慣を考慮した執筆姿勢矯正装置の提供により、使用者が「虚掌実指」の執筆要領を把握し、正確に、気軽に、快適に、手書きの機能を発揮でき楽しい学習を図ることが極めて重要な課題である。

【００１６】

上記の課題に鑑みて、本考案は、間違った執筆による痛みや傷害を回避し、執筆の姿勢を正確に学習するための執筆姿勢校正装置を使用者に提供することを目的とする。

【００１７】

また、本考案は、執筆姿勢の間違い又は力の入れすぎの場合、それが改善されるように、検知機能を有し警告発信可能の執筆姿勢矯正装置を使用者に提供することを目的とする。

【００１８】

また、本考案は、筆記時の力の入れすぎを正確な執筆で回避し適当な力を把握するために、検知機能を有する執筆姿勢矯正装置を使用者に提供することを目的とする。

【００１９】

上記の目的を達成するために、本考案に係る執筆姿勢矯正装置は、間違った執筆による痛みや傷害を回避し、執筆の姿勢を正確に学習するための執筆姿勢矯正装置を使用者に提供することを目的とする。本考案の執筆姿勢矯正装置の好ましい態様の一つは、使用者が手の平に握るための本体と、前記本体のトップに形成され使用者の虎口に当接されるための当接部と、前記本体の片側に形成され、使用者の親指が位置決めされるための第1の位置決め部と、前記本体の別の片側に形成され、筆記用具が位置決めされるための第2の位置決め部と、前記第2の位置決め部の前記本体より離れた片側に形成され、使用者の中指が位置決めされるための第3の位置決め部と、前記第2の位置決め部と前記第3の位置決め部との間に形成され、使用者の人差し指が位置決めされるための第4の位置決め部と、前記第3の位置決め部の前記第2の位置決め部より離れた片側に形成され、使用者の薬指と小指が握って自然に湾曲するための握り部と、備えることを特徴とする。

【００２０】

前記第1の位置決め部、第2の位置決め部、及び第4の位置決め部により、使用者の親指、中指、及び人差し指の加力点を結合させ、使用者の薬指と小指を中指の後に付随させることで、使用者の手指が本考案の執筆姿勢矯正装置によって執筆姿勢を矯正でき、筆記用具を握る場合、手指が自然に湾曲して掌に接触することがなく、掌を中空に保持する状態となる。

【００２１】

本考案に係る執筆姿勢矯正装置は、使用者が筆記用具を握る場合、手指が自然に湾曲して掌に接触することがなく、掌が中空となって手指を気軽に正確に使用することができるため、従来技術の種々の欠点を解決するとともに、使用者が疲労を感じず筋肉や骨格をリラックスでき、且つ異なるサイズの筆記用具に応用することもできる。

【００２２】

本考案に係る執筆姿勢矯正装置の他の好ましい態様の一つは筆記用具の頭部に設置されている執筆姿勢矯正装置であって、前記頭部の片側に形成され、使用者の親指が位置決めされるための第1の位置決め部と、前記第1の位置決め部の片側に形成され、使用者の人差し指が位置決めされるための第2の位置決め部と、前記第2の位置決め部の前記第1の位置決め部より離れた片側に形成され、使用者の中指が位置決めされるための第3の位置決め部と、前記第1の位置決め部、前記第2の位置決め部、前記第3の位置決め部にそれぞれ対

応して設置され、使用者の親指、人差し指及び中指が前記第1の位置決め部、前記第2の位置決め部、前記第3の位置決め部を過度に握る場合、使用者に警告信号を発する複数の検知部材と、を備え、さらに、少なくとも前記第1の位置決め部、前記第2の位置決め部、前記第3の位置決め部のいずれかに滑り止め構造が形成され、手指の下滑りを防止し、正確な執筆位置を確保することを特徴とする。

【００２３】

このような筆記用具の頭部に設置された執筆姿勢矯正装置では、使用者の手指が気軽に自然に執筆することができ、親指、中指及び人差し指等の3指の加力点が結合されることによって正確な執筆姿勢の学習が可能であるとともに、従来技術のように間違った姿勢で執筆する場合、警告を使用者に発することができないという問題を解決することができるため、使用者は執筆姿勢の間違いや力の入れすぎに即時に気付いて矯正を行うことが可能である。

【００２４】

下記は特定の具体的実施例によって本考案の実施方式を説明する。明細書に記載の内容によってこの技芸に習熟した者は簡単に本考案のその他の利点や効果が理解できる。本考案は図示の実施の形態に限定されるものではなく、本考案の技術思想の範囲内で数々の変更態様が可能であることは言うまでもない。

【考案を実施するための最良の形態】

【００２５】

以下の実施例は、本考案の観点をさらに詳しく説明する。ただし、本考案の範囲はこれらの実施例に限定されるものではない。

（第1の実施例）

図5ないし図7は本考案に係る執筆姿勢矯正装置1の第1の実施例に基づいて描かれた構造を模式的に示す。図に示すように、本考案に係る執筆姿勢矯正装置1は、本体11、当接部12、第1の位置決め部13、第2の位置決め部14、第3の位置決め部15、第4の位置決め部16、及び握り部17を備える。本考案の実施方式は、筆記用具100を右手で握る使用者が本考案を応用する場合を例にして説明しているため、図面において筆記用具100を右手で握る場合に本考案が応用される姿勢矯正構造のみを示す。ただし、本考案に係る執筆姿勢矯正装置1は、筆記用具100を左手で握る使用者に応用される場合、筆記用具100を左手で握る姿勢矯正構造に対応して設計すればよい。すべての使用者が適用対象であって、かつ、手部構造には変わりがないことから、本考案の特徴や構造をより簡単明瞭にするため、筆記用具100を右手で握る姿勢矯正構造のみを例にして説明し、その他の部分を省略する。

【００２６】

図に示すように、本体11は使用者が手の平で握られるように、例えば水滴状である本体表面11aを有し、それによって使用者の虎口が本体表面11aにおける円滑の部分に当接され、使用者の虎口両側の指（即ち親指と人差し指）が勢いにしたがって本体表面11aのテーパーされた部分に当接される。実際に応用する場合、本体11及び本体表面11aは使用者の年齢、性別、執筆習慣（例えば左手執筆または右手執筆）またはその他の必要に応じてサイズを変更することができる。本体11は、握り感がよく、力が入りすぎないように、軟質または軽質材料からなってよい。

【００２７】

本体11は使用者の年齢、性別、執筆習慣（例えば左手執筆または右手執筆）またはその他の必要に応じてサイズを変更することができるため、実際に応用する場合、例えば学齢前の児童、小学生、中学生、成人、男性、女性、及び左利き等の異なる使用者が選択できるように、上記の必要及びその他の必要に応じて異なる使用者に応用されうる類別、等級別の本体を製作することもできる。

【００２８】

当接部12は、使用者の虎口に当接されるように、本体11のトップから下へ延びる弧形構造に形成されている。本実施例における当接部12は本体11のトップから下へ延びる弧形構造であるが、それに限定されるものではなく、例えば凹状構造またはその他の適当な構造

のものであってもよい。

【００２９】

第1の位置決め部13は使用者の親指が位置決めされるように、本体11の片側に形成されている。図5及び図6に示すように、第1の位置決め部13は当接部12に接続され凹状となり、かつ、使用者の親指が第1の位置決め部13に位置決めされる場合、使用者の親指の第2の指節は筆記用具100の頭部100aを挟み、使用者の親指の第2の指節が頭部100aの筆先より約2～3センチ離れた筆管の上に位置決めされる。第1の位置決め部13により、使用者の親指が勢いにしたがって当接部12のテーパーされた部分に当接されることとなる。

【００３０】

第2の位置決め部14は、筆記用具100が位置決めされるように、本体11の別の片側に形成されている。図に示すように、第2の位置決め部14は、当接部12の第1の位置決め部13より離れた箇所に接続され凹状となるものであって、使用者が筆記用具100を第2の位置決め部14に置く場合、筆記用具100は書きたい紙面と45度を成す角度に傾くように保持される。筆記用具100は例えばボールペン、鉛筆、万年筆、サインペン、マジックペン（marker pen）、針ペン（needle pen）、水筆ペン、ドローイングペン（drawing pen）、及びその他の同等効果の筆記用具であればよく、かつ、例えば円形、多辺形等の形状であってよい。本実施例における第2の位置決め部14は凹状の構造であるが、筆記用具100を書きたい紙面と45度を成す角度に傾くように固定し保持できるものであればよく、第2の位置決め部14の構造は実際の必要に応じて変化してよく、それらに限定されるものではない。

【００３１】

第3の位置決め部15は、使用者の中指が位置決めされるように、第2の位置決め部14の本体11より離れた片側に形成されている。図に示すように、第3の位置決め部15は当接部12に接続され凹状となり、使用者の中指が第3の位置決め部15に位置決めされる場合、使用者の中指の第3の指節の左側は筆記用具100に当接される。第3の位置決め部15により、使用者の中指が勢いにしたがって本体表面11aのテーパーされた部分に当接される。本考案は右手で執筆する者を例にして説明したため、使用者の中指の第3の指節の左側が筆記用具100に当接されるが、左手で執筆する者を例にしてみれば、使用者の中指の第3の指節の右側が筆記用具100に当接される。即ち、執筆者が右利きでも左利きでも本考案に適用される。

【００３２】

第4の位置決め部16は、使用者の人差し指が位置決めされるように、第2の位置決め部14と第3の位置決め部15との間に形成されている。図に示すように、第4の位置決め部16はやや湾曲状となることで、使用者の人差し指の第3の指節が筆記用具100の頭部100aが筆先より約2～3センチ離れた筆管を挟む。筆記用具100が第2の位置決め部14に位置決めされる場合、筆記用具100の後部100bが使用者に軽く当接され第4の位置決め部16の人差し指の第1の指節側に位置決めされる。第1の指節側とは、指の根部（即ち掌に接続された部分）から、指の根部と掌の関節を接続するものが第1の関節、その次が第2の関節及び第3の関節である。一般に、親指には2つの関節があるが、その他の指には3つの関節があることはいうまでもない。

【００３３】

握り部17は、使用者が薬指と小指を握って自然に湾曲するように、第3の位置決め部15が第2の位置決め部14より離れた片側に形成されている。図7に示すように、使用者の薬指と小指がその中指の後に付随され、第1の位置決め部13、第3の位置決め部15、及び第4の位置決め部16により使用者の親指の第2の関節、中指の第3の関節の左側、及び人差し指の第3の関節の加力点を結合させることで、使用者のすべての指が5ピースのバナナの如く自然に湾曲する。

【００３４】

本考案に係る執筆姿勢矯正装置1は、使用者が第1の位置決め部13及び第4の位置決め部16によりその親指の第2の指節と人差し指の第3の指節を頭部100aの筆先より約2～3センチ離れた筆管に位置決め、使用者の中指の第3の指節の左側が第3の位置決め部15により筆管

に当接され、薬指と小指が極めて容易に気軽な姿勢で中指の後に付随されることで、本考案に係る執筆姿勢矯正装置1により使用者の指の執筆姿勢を矯正することができ、筆記用具100を握る場合、手の平が中空となることでやや湾曲となる五指と掌が中空空間を作るように保持することを使用者に習慣付けることができる。

【００３５】

使用者の執筆姿勢は、執筆姿勢矯正装置1によって矯正することができ、一定の時間後、使用者の筋肉や骨格の運動を正確で気軽な姿勢に変更することができる。即ち、ラケットを手で握って球技運動をしている如く、運動者が脳からの運動命令を間違いなく精確にラケットに伝送し、またはピアノ練習の如く、運指法が習熟されたのち、楽譜を見ることもなく反射的にメロディーを正確に演奏することができるようなものである。本考案は、執筆姿勢矯正装置1によって最も理想的な執筆姿勢を確立するとともに、使用者の執筆姿勢を矯正することにより、正確に、気軽に、手指の運用で筆記を行うことができるため、圧力や痛みを感じることはない。

（第2の実施例）

図8ないし図10は本考案に係る執筆姿勢矯正装置1'の第2の実施例に基づいて描かれた構造を模式的に示す。図に示すように、本考案に係る執筆姿勢矯正装置1'は筆記用具100'の頭部100a'に設置されており、執筆姿勢校正装置1' は第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、第3の位置決め部15'、及び複数の検知部材17'を備える。本実施例における執筆姿勢矯正装置1'は前記実施例の作用と同じであるため、本考案の特徴と利点がより分かりやすくなるように、ここで、同じ作用である箇所を省略し、異なる構造や作用のみを説明する。

【００３６】

図8及び図9に示すように、第1の位置決め部11'は、使用者の親指が位置決めされるように、頭部100a'の片側に形成されている。図に示すように、第1の位置決め部11'は浅い凹槽状となり、使用者の親指の第2の指節をほぼ収容することができる。第2の位置決め部13'は、使用者の人差し指が位置決めされるように、第1の位置決め部11'の片側に形成されている。図に示すように、第2の位置決め部13'は浅い凹槽状となり、使用者の人差し指の第3の指節をほぼ収容することができる。第3の位置決め部15'は、使用者の中指が位置決めされるように、第2の位置決め部13'の第1の位置決め部11'より離れた片側に形成されている。図に示すように、第3の位置決め部15'は浅い凹槽状となり、使用者の中指の第3の指節の左側をほぼ収容することができる。

【００３７】

本実施例において浅い凹槽状となる第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15'を例にして説明しているが、第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15’は、使用者の親指、人差し指、及び中指をそれぞれ収容することができるその他の構造であってもよく、例えば、それぞれ、使用者の親指、人差し指、及び中指形状に対応した構造であってもよい。即ち、第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15'は、使用者の親指、人差し指、及び中指を確実に位置決めするものであって、使用者の親指の第2の指節肉、人差し指の第3の指節肉、及び中指の第3の指節肉の左側を、頭部100a'より約2～3センチ離れた筆管に位置決めする構造であればよく、本実施例に記載のものに限定されるものではない。

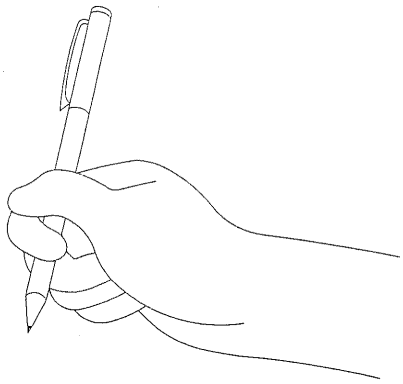
【００３８】

それらの検知部材17はそれぞれ第1の位置決め部11'、 第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15’に対応して設置され、使用者の親指、中指、及び人差し指が第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15'を過度に握った場合、使用者に警告するための警告信号が発信される。それらの検知部材17は一般の圧力検知器と、例えばインジケータ、ブザー、及び／又はその他の適当な素子との組合せからなってよく、使用者が第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15'のいずれかを力を入れすぎて握った場合、使用者に即時に警告するための警告ライト信号または警告の音声を響かせるような信号が発信される。圧力検知器、インジケータ、及びブザー等の素

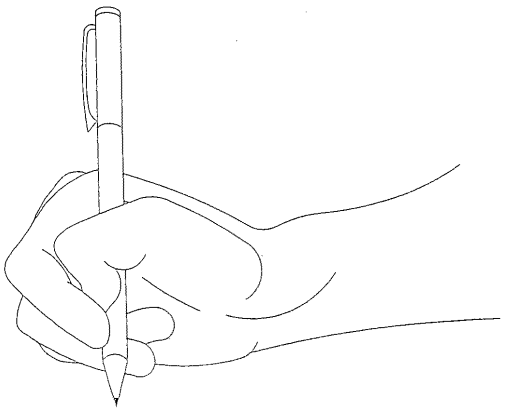
子構造及びその作用原理は周知のものであるため、ここでは詳しい説明を省略する。
【００３９】
図10に示すように、筆記用具100'の頭部100a'に設置される執筆姿勢矯正装置1'により、使用者の指は気軽に、自然の方式で執筆することができるため、使用者の執筆姿勢を矯正することができる。図11に示すように、本実施例における執筆姿勢矯正装置1'は前記実施例における執筆姿勢矯正装置1と使い分けることなく同時に使用してもよく、使用者が最良の執筆姿勢による矯正効果を得られるようにしてもよい。また、使い分けてもよいことはいうまでもない。使用者は例えば第1の実施例における執筆姿勢矯正装置1をまず使用して執筆の姿勢を矯正し、一定の時間後、執筆姿勢矯正装置1’に取り替えて矯正を行ってもよい。これにより、使用者の執筆姿勢を順序にしたがい次第に矯正することができる。即ち、執筆姿勢矯正装置1'は前記実施例における執筆姿勢矯正装置1と同時に使用してもよく、使い分けてもよく、それらに限定されるものではない。
【００４０】
執筆姿勢矯正装置1'はさらに滑り止め構造（図示せず）が形成されてもよい。滑り止め構造は例えば階段状、リング状、粗状またはその他の適当な滑り止め構造であってもよく、使用者の手指が書いているの間に下滑りすることを防止する。当然、第1の位置決め部11'、第2の位置決め部13'、及び第3の位置決め部15'自体は滑り止め機能をもともと有するため、前記の滑り止め構造は滑り止め効果を強化するためだけであり、本願の必要条件を構成するものではない。しかも、執筆姿勢矯正装置1'には露出構造がないため、筆記用具100'と結合された場合、従来技術の欠点を解決することができ、収容や携帯上の不具合となることはない。
【００４１】
また、本実施例において執筆姿勢矯正装置1'を筆記用具100'の頭部100a'に一体形成するが、執筆姿勢矯正装置1'は筆記用具100'の頭部100a'に外付けされ異なる筆記用具100'に応用されるものであってもよく、それらに限定されるものではない。
【００４２】
したがって、本考案に係る執筆姿勢矯正装置の応用により、使用者の親指、中指、及び人差し指の3本の指の加力点が結合され、使用者が正確な執筆姿勢を学習でき、従来技術のように、効果の不良や使用の不便等、さらに、使用者の筆記姿勢の間違いや力の入れすぎの場合に即時に警告を発することができないという種々の問題が解決されることで、使用者が即時に執筆姿勢の間違いに気付いて矯正を行うことができる。
【００４３】
本実施例において警告信号を使用者に発するように、執筆姿勢の矯正すべき信号をそれらの検知部材17によって発する。当然、第1の実施例においても、使用者に警告するために類似した検知部材が装着されてもよく、且つ滑り止め構造も設置することができる。即ち、上記の実施例は本考案を例示する目的で示すものであり、本考案は、これらによって何ら限定されるものではない。本考案に係る実質的な技術内容は、下記の実用新案請求の範囲に定義されており、この技術分野に精通したものは実用新案請求の範囲を脱しない範囲で色々な修飾や変更が可能であり、そうした修飾や変更は本考案の技術範囲に入るものである。
【図面の簡単な説明】
【００４４】
【図１Ａ】従来の執筆姿勢を模式的に示す。
【図１Ｂ】従来の執筆姿勢を模式的に示す。
【図２Ａ】従来の執筆姿勢矯正装置を模式的に示す。
【図２Ｂ】図２Ａがに示した従来の執筆姿勢矯正装置が適用された使用状態を模式的に示す。
【図３Ａ】従来の他の執筆姿勢矯正装置を模式的に示す。
【図３Ｂ】図３Ａに示した従来の執筆姿勢矯正装置が適用された使用状態を模式的に示す。

【図４Ａ】従来のさらに他の執筆姿勢矯正装置を模式的に示す。
【図４Ｂ】図４Ａに示した従来の執筆姿勢矯正装置が適用された使用状態を模式的に示す。
【図５】本考案に係る執筆姿勢矯正装置の第1の実施例を模式的に示す。
【図６】図５の背面図である。
【図７】本考案に係る執筆姿勢矯正装置の第1の実施例の使用状態を模式的に示す。
【図８】本考案に係る執筆姿勢矯正装置の第2の実施例を模式的に示す。
【図９】図8の背面図である。
【図１０】本考案に係る執筆姿勢矯正装置の第2実施例の使用状態を模式的に示す。
【図１１】本考案の第1と第2の実施例が結合された執筆姿勢校正装置を模式的に示す。
【符号の説明】
【００４５】
1、1'　執筆姿勢矯正装置
10　執筆練習機
10a　凹槽
10b　パッド
10c、23a　切欠き
11　本体
11a　本体表面
11'、13　第1の位置決め部
12　当接部
13'、14　第2の位置決め部
15、15'　第3の位置決め部
16　第4の位置決め部
17　握り部
17'　検知部材
20　訓練器
21　筆嵌め筒
22、23　穿通筒
30　執筆練習器
31　開口
32　位置決め点
33　シフト体
100、100'　筆記用具
100a、100a'　頭部
100b　後部

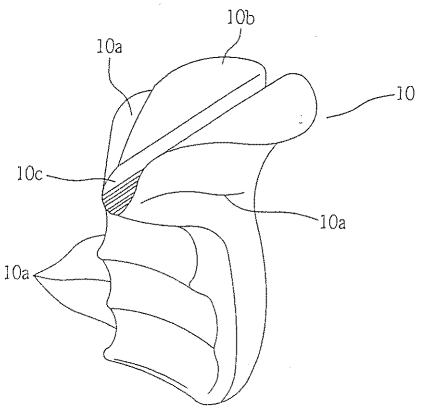
【図１Ａ】



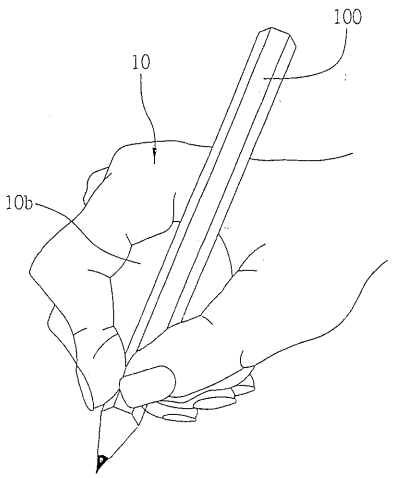
【図１Ｂ】



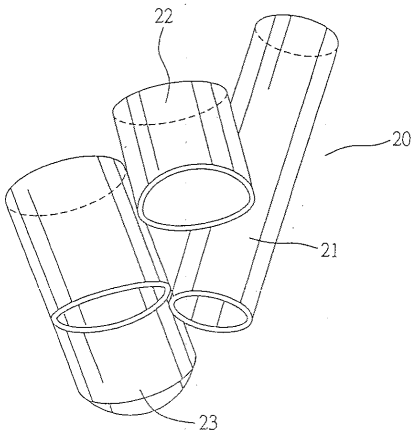
【図２Ａ】



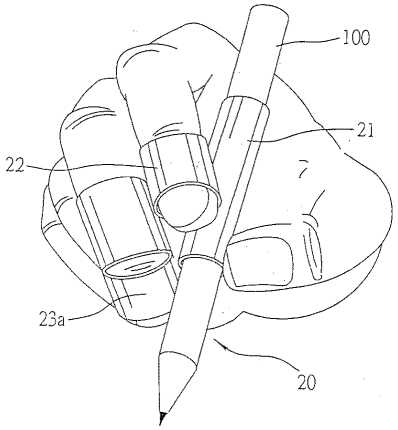
【図２Ｂ】



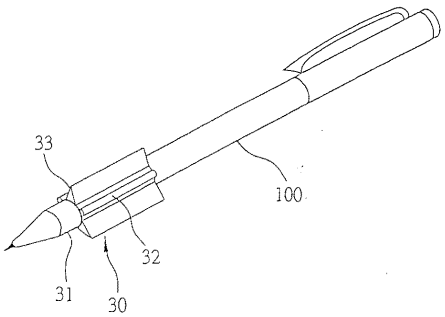
【図３Ａ】



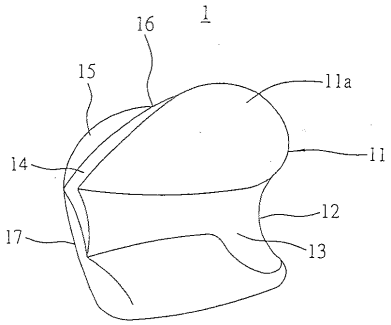
【図３Ｂ】



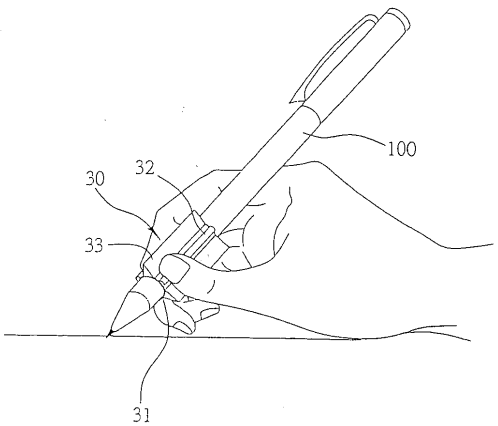
【図４Ａ】



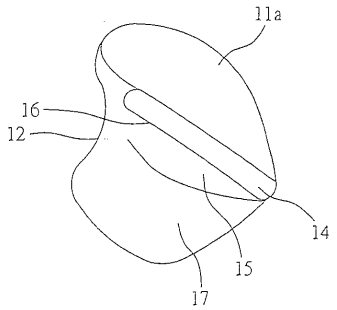
【図５】



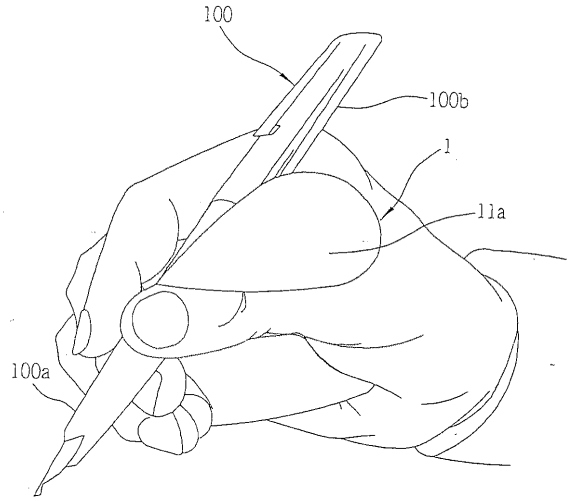
【図４Ｂ】



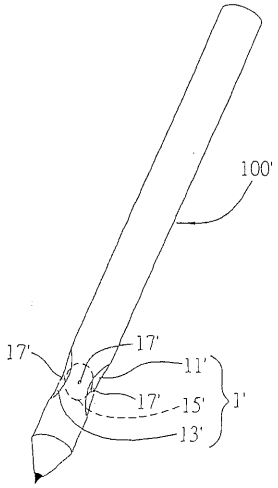
【図６】



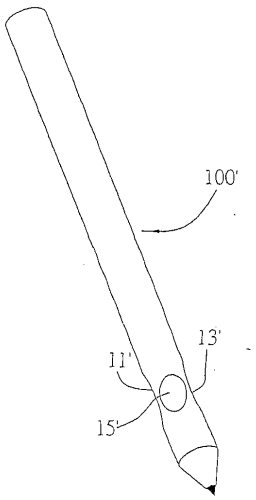
【図７】



【図８】



【図９】



【図１０】

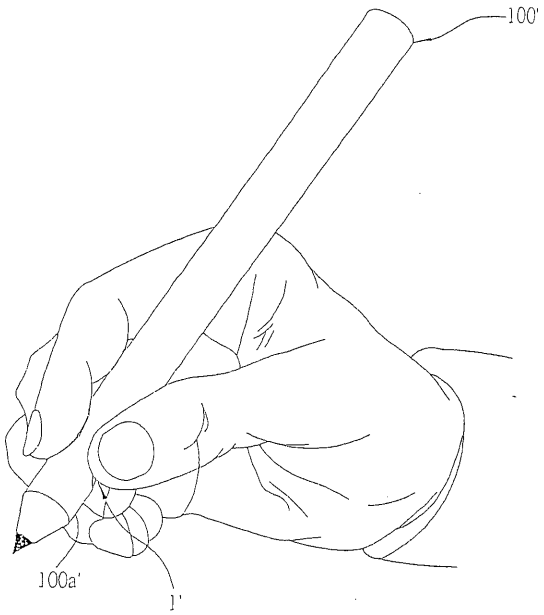


図10

【図１１】

